

刑務所に服役している受刑者の健康管理を支援しようと、支援団体や専門家らが取り組みを始めている。受刑者は腰痛や歯の痛みなどを抱えても治療

を受けるまで時間がかかり、症状が悪化する場合もある。社会復帰後に安定した生活を送るためにも、服役中から心身のケアが重要という。(中山岳)

受刑者心身ケア 支援を

腰痛や歯痛など治療までに時間

昨年十二月、立正大(東京都品川区)で開かれた意見交換会。元受刑者、大学教員、医師らが刑務所の医療のあり方などを話し合った。受刑者の社会復帰を支援するNPO法人「マザーハウス」理事長の五十嵐弘志さん(左)は「服役中に感じる心身の不調をケアできる仕組みが必要だ」と訴えた。

マザーハウスと岐阜保健大講師の中谷こずえ氏(老年看護学)は二〇一七年十月から一年間、刑務所など五十六の矯正施設にいる受刑者にアンケートを実施。健康状態などを質問し、二百七十五人から有効回答を得た。アンケート結果によると、受刑者の体の不調のうち最多は腰痛で、回答者の六割近くを占めた。次に歯の症状が多く、四割近くが訴えた。三十歳以上の受刑者の歯の数が、一般成人の平均と比べて少ないことも分かった。

受刑者は刑務所で病気などになると、「願箋」を提出し、認められれば医師の診察を受け

る。ただ、すぐに診察が受けられるとは限らない。元受刑者の男性は服役中に歯の痛みがあり願箋を出したが、診察を受けられるまで三カ月待ったという。「刑務所では複数の受刑者から願箋が集まらないうと、歯科医師を呼ばなかった。診察を待つ間は痛み止めを飲み続けた」と振り返る。

受刑者のなかには服役中に歯

周病などにかかり、歯を抜かざるを得なくなった人もいるという。服役の経験がある五十嵐さんも「私は入れ歯をしている。出所後に歯科医院に通う元受刑者も少なくない」と話す。

刑務所での健康管理を支援するため、マザーハウスは中谷氏の協力を得て、受刑者を対象にした通信教育を昨秋から始めた。希望する受刑者に、腰痛や歯の健康に関する知識を含めて体のケアについて学べる教材を送り、中谷氏が助言するなどしている。



支援団体や専門家が議論

受刑者の健康についてアンケート結果を説明する岐阜保健大の中谷こずえ氏(左)や、NPO法人マザーハウスの五十嵐弘志理事長(右から2人目)＝東京都品川区の立正大で

刑務所が「福祉施設化」

詐病のケースも…「カウンセリングが不足」

中谷氏は「刑務所で自分の健康課題を見つけてケアすることは、自らを大切にすることだ。それができれば他人を大切にする意識も育め、社会復帰後の幸せにもつながる」と強調する。

立正大の意見交換会では、高齢化する受刑者の健康問題も話題になった。多摩少年院の小林誠医師課長は、一般社会より刑務所の高齢化率は高くはないとしつつも、「高齢で介護が必要な受刑者が出てくる。刑務所が福祉施設化している」と指摘した。

一方、懲役刑の受刑者が刑務所内の労働を避けようとしてその体調不良を訴える「詐病」のケースもあり、診断する医師や管理する刑務官がストレスを抱えているとの意見も出た。立正大の相沢育郎助教(刑事政策学)は「刑罰制度全体の改善を図りつつ、医療を少しでも良くすることが必要ではないか」と述べた。

五十嵐さんは、受刑者の多くは出所が近づくと、社会復帰後に仕事や住まいを確保できるかなど不安になると指摘。「詐病を訴える受刑者も含め、カウンセリングが不足している。心のケアも重要だ」と話した。